

大学生における読解力と福嶋式国語指導法における論理的思考力の要素との関連に関する計量的研究の試み

大西康雄

Metrical analysis on correlations of the factors of logical thinking in Fukushima's Japanese education method and Japanese reading comprehension among university students

Ohnishi, Yasuo

Abstract

The purpose of this article is quantitative analysis on the correlation of university students' reading comprehension and some factors of logical thinking proposed by Fukushima Takashi who is an educator of Japanese. He argues that to improve students' ability of reading comprehension we should take account of only 3 factors: ability of abstraction / concretization of things or words, ability of contrasting two things or phrases and ability of thinking causal relation. And he says that repeated practice of training these abilities leads improvement of students' reading comprehension. To prove his arguments, I analyzed the relation of these three factors and comprehension of newspaper articles of university students. And I found that some correlation of abstracting abilities, ability of thinking causal relations and their comprehension.

キーワード：読解力、福嶋式国語指導法、日本語教育

key words: Japanese reading comprehension, Fukushima's Japanese education method, Japanese Education

1. はじめに

筆者の所属する山梨県立大学国際政策学部では、教員の間で学生の専門書や論文に対する論理的な読解力不足を指摘する声が上がることがある。また、どのように学生の読解力が付くような指導を行うべきか、悩む教員もいるようである。しかし、読解力には様々な側面が考えられ、そもそも読解力とは何かについてさえも共通の認識はなく¹⁾、どのように指導したらよいか、迷うところである。

ところで、近年国語（日本語）教育界において、シンプルで効率的な国語指導法であると主張する、福嶋式国語指導法というものがある。この

提唱者の福嶋隆史は、「国語力」とは、論理的思考力であり、これは抽象・具体の関係を整理する力、対比関係を整理する力、因果関係を整理する力の三つに分解される、と主張する（福嶋、2010, p. 10）。そして、この三つの論理的思考力を鍛えるための単純なトレーニングを反復して行えば比較的簡単に読解力を伸ばすことができると言う。

本稿の目的は、福嶋式国語指導法において、福嶋隆史が主張する上記三つの論理的思考力が、果たして本学の学生の読解力と本当に関連しているのかどうかを計量的に検証するところにある。

山梨県立大学 国際政策学部 総合政策学科

Department of Policy Management, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

2. 読解力指導をめくって

論理的な文章を読めるようにするにはどうしたら良いのか。例えば、論理学者の野矢茂樹は、そのような論理力をトレーニングするための著書を出している（野矢，2001および2006）。これらの著書において特にキーとなっているのは接続詞の理解である。しかしながら、野矢の議論は、興味深いながらもかなり複雑であり、直ちにこれらを学生の指導に役立てるのはかなり困難と言わざるを得ない。また新井紀子（Arai et al., 2017）らは、AIの能力を確認するために開発したリーディングスキルテスト（RST）で、読解力を、係り受け解析、照応解析、同義文判定、推論、具体例同定、イメージ同定の6つの観点に分解して測定している。さらに新井らはこれを中・高校生を対象に実施し、AIの出した結果と比較して、中・高校生の多くの読解力がAIに満たないと指摘した。この結果は後に、一般書として出版され（新井，2018）、大きな反響を呼んだ。但し、リーディングスキルテストに関しては、センター試験の国語の得点との相関が低いことが報告され（石垣，菅原，2020）、さらに、リーディングスキルテストが測っている読解力は従来国語教科で目指されてきた読解力と異なること、またリーディングスキルテストで測るような読解力を学習するモデルの作成が困難であることが指摘されている（間瀬，富安，2019）。

それに対し、国語教育に特化した私塾を主宰する福嶋隆史（2010a, b）の主張は、従来の国語教育は感覚を重視しすぎたと批判し、「国語力」とは論理的思考力のことであるとするとともに、従来の論理に関する議論は複雑すぎると批判し、学ぶべき論理をシンプルに3つに絞っているという点に特徴がある。その3つとは、「言いかえる力」すなわち、抽象・具体の関係を整理する力、「くらべる力」、すなわち、対比関係を整理する力、「たどる力」、すなわち、因果関係を整理する力だとする。そしてこの3つの力を養うための比較的単純な練習問題を繰り返すことで、読解力に資するような論理的思考力が養えるとする。福嶋の主張は、マスメディアなどにも取り上げられ、一定の

反響があるようである。また、福嶋の主張する指導法もシンプルであり実践しやすいものであって魅力のあるものだが、しかしその主張が本当に正しいのかを計量的に検証した研究は管見の範囲では見当たらなかった。

そこで、本研究では、福嶋が主張する3つの力が果たして読解力と関連があるのかを計量的に検証することを目的とする。

3. 研究方法

3.1 分析データ

データは、2020年9月、国際政策学部の主として1年生を対象とした必修の入門授業にて、Google Formを使ってオンラインにて収集した。回収票は88票で、内一年生は全82名中80名（欠席者2名、なお総合政策学科40名、国際コミュニケーション学科40名）、他に、二年生、三年生が4名ずつであった。質問票はGoogle Formで4つのフォームに分け回答を依頼したところ、3名は一部のフォームを不注意から抜かして回答したため、完全な回答は85票となった。

なお、ここで本データの限界についても指摘しておきたい。データは本学国際政策学部学生を対象に収集している。従って、大学入学者選抜大学入試センター試験の点数等によって、ある程度学力が均質な集団が対象となっている。そのため、より学力のばらつきの大きい集団を対象とした調査であれば、高い相関が出る項目であっても、このような、学力の質で輪切りにされた集団を対象とした場合、全般的に相関が低く出る可能性が高い。場合によっては無相関になる場合もあろう。従って本調査において相関関係が確認できなかったとしても、その項目はより多様な集団を対象とした場合でも意味がないと決めつけることはできない。一方、本学入学後の学生の国語力向上に資するための資料を得るという意味では、本調査も一定の意味を有すると言える。

なお、質問項目は、下記のとおりである。

- Q1 [語の抽象化] 5つの単語をまとめて抽象化して表現させるもの（6問）
- Q2 [語の具体化] 抽象的な言葉に含まれる

具体的な語を5つ答えさせるもの（6問）

- Q3 [文の要約] 文章の内容を要約して体言の形に言い換えて答えさせるもの（5問）
- Q4 [対比文作成1] 対比関係にある2つの命題を考えて回答させるもの（3つ回答させる）
- Q5 [対比文作成2] ある主題に関して視点を変えて対比関係にある2つの命題を作らせて回答させるもの（3つ回答させる）
- Q6 [因果文作成1] ある命題の上半分を提示し、それと因果関係にある下半分を考えて回答させるもの（3問）
- Q7 [因果文作成2] ある命題の下半分を提示し、それと因果関係にある上半分を考えて回答させるもの（3問）
- Q8-1 [比喩表現理解] 新聞に掲載された計報記事を読んで、その文中にある比喩表現を具体的に言い換えて回答させる。
- Q8-2 [要点把握] 上の記事の要点を1文で答えさせる
- Q9-1 [対比関係発見] 新聞に掲載された記事を読んで、文中から対比関係にある概念を3つ抜き出させ、対比関係が分かりやすいように書き直して回答させる。
- Q9-2 [文章の応用理解] Q9-1 記事にある、筆者の主張を援用した論理推論を答えさせる。
- Q9-3 [文章の要約] 同記事の要点を、抜き書きではなく分かりやすい言葉に直して答えさせる。

以上のうち、Q1からQ7までは、福嶋式で考えられている国語力の指標をどこまで到達している

かを測るものであり、いわば説明変数項目として設定している。このうち、Q1～Q3は、福嶋の主張する「抽象・具体の関係を整理する力」に対応する。Q4およびQ5は、「対比関係を整理する力」に対応し、Q6およびQ7は「因果関係を整理する力」に対応する。

Q8およびQ9は、文章の読解力を測るもので、ここでの被説明変数項目として設定した質問項目である。

この他に、福嶋式またはそれに類した国語力養成訓練を学校の授業等で受けた経験があるかどうかを、アンケートとしてQ10で質問した。具体的な質問票の内容は文末に資料として付す。

さらに、回答者の回答について次のように点数を与えた。各質問項目のサブクエスチョンに対し10点満点で採点するとともに、さらに質問ごとにサブクエスチョンの回答を合計したものをやはり10点満点に換算し、点数化した。このようにいずれも10点満点で標準化した点数に対して、相関係数等を計算し、分析を行った。

なお、回答者の回答への評価点の与え方と、回答の特徴についても記しておきたい。

Q1 [語の抽象化]に関しては、5つの単語を抽象化する際に、より大きなカテゴリーに抽象化した場合は、半分の5点を与えた。例えば、クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ、犬かきという単語が並んでいるとき、泳法、あるいは水泳と答えた場合は10点を与えているが、スポーツと答えた場合は、5点としている。

この問題の集計結果は次のようになった。平均

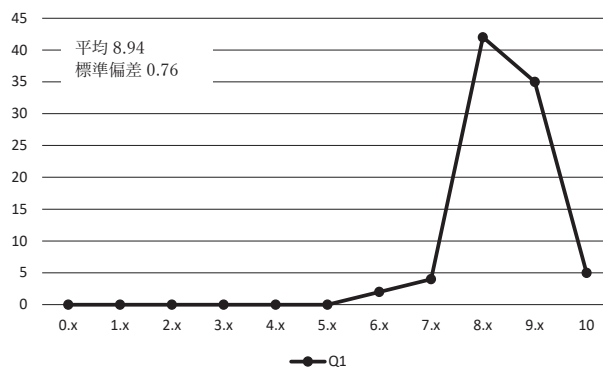


図1 Q1集計結果

点は高く、標準偏差も低くばらつきは少ないが、意外に全問正解者が少ない結果となった。

Q2 [語の具体化]に関しては、具体的な語をいくつか書けたかに応じて得点を与えているが、中には、考え付かないのではなく、不注意で1つずつしか答えていないのではないかと思われる回答が散見された。この辺りは回答の仕組みの設計をよく考えるべきであった。従って、この項目に関しては正確に測定できていない可能性が高い。

この集計結果は正答者が最も多く (45名) 左に行くにつれ急速に分布が減るベキ分布状グラフになった。但し3点付近で、不注意回答によると推定される小さな山が見られた。それにもかかわらず正答率は高く、学生にとって難易度の低い問題だったと推定される (平均8.50 標準偏差 2.39)。

Q3 [文の要約]については、内容のカバー度合いに応じて減点を行っている。平均は7.95 と高い一方、標準偏差は1.19と低い。8点台を中心に鋭い山が立つヒストグラムとなったが、意外にも満点者は誰もいなかった。

Q4,5 [対比文作成1,2]については、2つの命題

がきちんと対比関係にあるかどうか、また普遍的な命題として成立するかどうかという観点から得点を与えるとともに、いくつ作れたかをカウントしている。Q4に関しては特に正答率が高く (平均9.00 標準偏差 1.92)、またQ3も正答に向かって分布が上昇するカーブを描いている (平均7.87 標準偏差 2.55)。いずれも満点に向かってベキ分布状となるヒストグラムとなったが、Q3 はやや傾斜がなだらかで凸凹が出た。学生にとって慣れた問題であることが推察される。

Q6, 7 [因果文作成1, 2]は因果推定を行う問題であり、論理的につながるような文章が作成できているか問う観点から得点を与えた。なお、Q6-2では「ロスジェネ」という言葉が分からなくて回答できなかったケース、およびQ7-1に関しては、質問の元になったことわざを知らなかったため減点を行ったケースがあった。Q6は正答率が高い一方、Q7では必ずしも高くなく、結果を考えるよりも原因を考えることの方が、難易度が高いものと考えられる。

Q8-1 [比喩表現理解]に関しては、抽象的な比

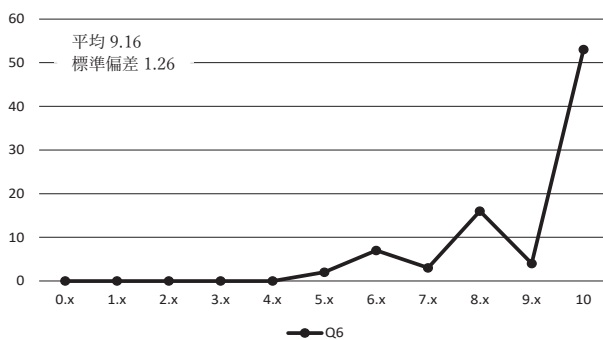


図2 Q6集計結果

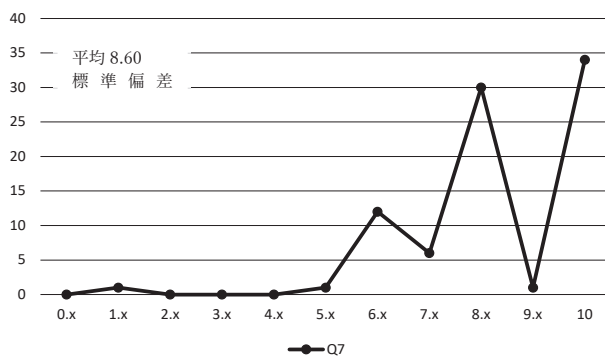


図3 Q7集計結果

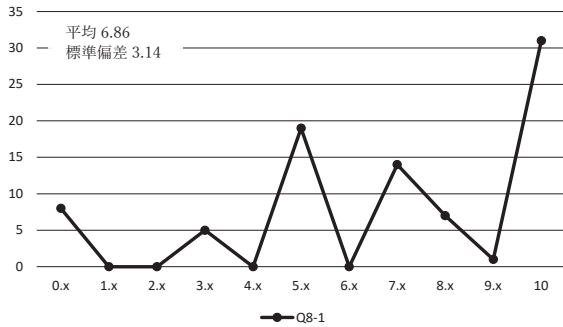


図4 Q8-1集計結果

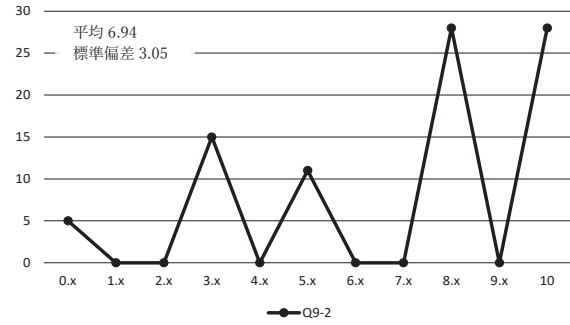


図6 Q9-1集計結果

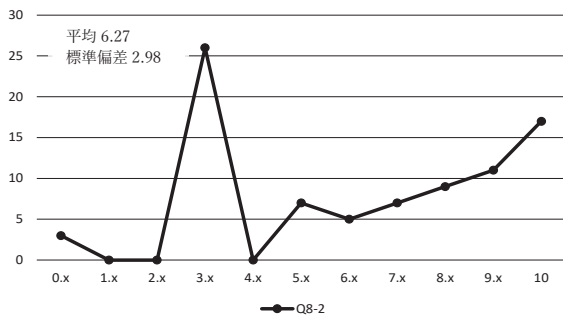


図5 Q8-2集計結果

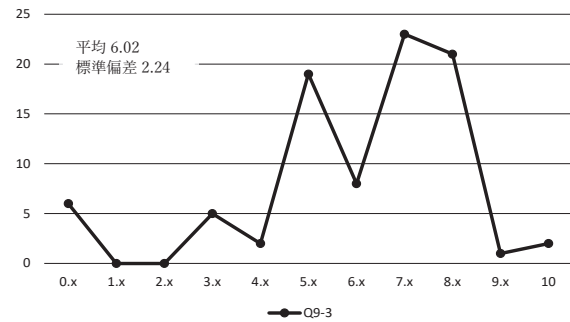


図7 Q9-3集計結果

喩表現が理解できるかどうかを問うている。これに関しては、ヒエラルキーという言葉を見て、人間関係や社会階級関係のことだと誤読するケースが比較的多くみられた。これについては原則5点に減点した。

Q8-2 [要点把握]に関しては、訃報記事という性格から、その目的は個人の業績や人となりを紹介することであるので、業績や人となりを要約した文を正解とした。その内容の網羅性や具体性に応じて適宜加減点を行った。しかし、回答の中には、個人の業績を紹介するのではなく、教訓的な内容の一節を抜き出して回答しているものが目立った。これについては3点に減点した。このような回答が出てくる理由として、文章の客観的内容よりも、主観性に引き付けて文章を読んでいるのか、あるいは、文章の全体構成が読み取れず、局所的な読み取りしかできていない、という二つの可能性が考えられる。

Q9-1 [対比関係発見]では、いくつ対比関係が抜き出せたかという点はもちろんであるが、抜き出した部分がきちんと対比的な関係になっているか、また、対比関係が分かりやすく書き直されて

いるかに応じて、適宜減点を行って評価した。平均点は4.91とかなり低く、一問も解答できない者が14名と最多となり、そこから徐々に下がって3点台以降10点までほぼ頻度があまり変わらないという分布となった。標準偏差も3.38と非常に大きい。

Q9-2 [文章の応用理解]に関しては、筆者の主張の要点は、「社会的信頼」の重要性であるが、その中身も含めて論じられているかどうかという観点で評価を行った。単に、「周囲に同調している」というような回答は低く評価した。

Q9-3 [文章の要約]に関しては、社会的信頼を高めるはずの仕組みや情報が、複雑化しかえって理解困難となった結果、むしろ社会的信頼を破壊する逆機能として働いており、それによって傷つけられた社会的信頼を回復することが急務であるというのが筆者の主張の要約であるが、特に、このような筆者の主張に含まれる逆説を理解しているかどうかという点を重視して評価した。従って、単に、社会的信頼を回復することが重要だ、というだけの回答は低く評価した。これは、内容的には抽象度が高く、かなり高度な理解が求められる

表1 福嶋式国語指導の経験 (多重回答)

	選択肢	度数	%
福嶋式 教育経験	なし	57	55.3%
	小学校	14	13.6%
	中学校	13	12.6%
	高校	15	14.6%
	予備校等	2	1.9%
	自習	2	1.9%
N=87	合計	103	100.0%

設問である。

また、Q10では福嶋式あるいは、それに準ずる国語指導を受けた経験を聞いているが、そのような指導を受けたことがあると回答しているものは、全体の35.5% (30名)、なしは65.6% (57名)であった。

因みに、Q1～Q9までの各質問項目同士の相関係数を計算すると、Q4,5：対比文1と2（相関係数 0.399 p=0.000）以外は、有意な相関関係は見当たらなかった。これらが国語力の異なる次元を見ているとすれば、当然の結果ともいえるが、同じ対比関係を考えるQ4,5の間で有意な相関関係があることを考えると、Q6,7：因果文作成1,2の間で有意な相関関係が認められないのは意外である。これに関しては念のため、Q6-2およびQ7-1において、知識の有無が得点差を生んでいるので、これを除外して相関係数を計算してみた。しかしながら、この場合でもやはり、両者の相関係数は0.049と極めて低かった。原因を考えると、結果を考えることは、異なる次元である可能性が示唆された。

3.2 分析方法とその結果

以上のように得られたデータに関して相関係数、重相関係数を求めることで、これらの項目間がどの程度関連しているかを調べてみた。まず、各項目間の相関を求めてみると表2のような結果が得られた。

表2 Q1～Q7とQ8,9との相関

		比喩理解	要点把握	対比関係 発見合計	文章の応 用理解	文章の要 約
語の抽象 化合計	ピアソン 相関	0.101	0.136	0.168	0.354	0.120
	有意水準 (両側)	0.359	0.215	0.119	0.001	0.270
	N	85	85	87	87	87
語の具体 化合計	ピアソン 相関	-0.102	0.078	-0.203	0.126	0.005
	有意水準 (両側)	0.351	0.478	0.060	0.245	0.966
	N	85	85	87	87	87
文の要約 合計	ピアソン 相関	0.000	0.161	0.071	0.047	0.009
	有意水準 (両側)	0.997	0.140	0.514	0.666	0.933
	N	85	85	87	87	87
対比文作 成1合計	ピアソン 相関	-0.054	0.005	0.067	0.018	0.029
	有意水準 (両側)	0.626	0.961	0.537	0.866	0.793
	N	85	85	87	87	87
対比文作 成2合計	ピアソン 相関	0.179	-0.024	0.138	-0.043	0.031
	有意水準 (両側)	0.101	0.824	0.203	0.693	0.777
	N	85	85	87	87	87
因果文作 成1合計	ピアソン 相関	0.083	0.310	0.233	0.134	0.081
	有意水準 (両側)	0.450	0.004	0.032	0.221	0.460
	N	85	85	85	85	85
因果文作 成2合計	ピアソン 相関	0.214	0.236	0.105	0.351	0.008
	有意水準 (両側)	0.049	0.029	0.337	0.001	0.942
	N	85	85	85	85	85

以上の結果を見てみると、Q1の語の抽象化能力、およびQ6、Q7の因果関係を含んだ文の作成が、文章の理解力にある程度の相関があるという結果となった。特に、因果文の原因部分を推測させるQ7[因果文作成2]が、有意な相関のある項目が最も多い結果となった。一方、難易度が非常に高いQ9-3[文章の要約]に関しては、どの項目とも有意な相関関係が見いだせなかった。Q2の語の具体化能力に関しては、今回のデータではほとんど相関がみられなかったが、これは、すでに指摘したようにデータ取得に問題があったためである可能性があり、今回の調査からは何とも言うことができない。また、Q4、Q5の文の対比関係を見出す力を問う問題と、読解力との関連に関しては有意な相関関係が見えなかった。

なお、Q8、Q9の相互の相関は表3の通りであった。

Q8、Q9の質問項目間に、一定の有意な相関関係があることが確認された。特にQ1～7までの質問項目と何の有意な相関関係が見いだせなかったQ9-3と同じ文章を対象にしたQ9-1、2との間

に有意な相関関係が見られ、これらは、要素分解困難な、文章に対する固有の理解というような残余要因が、これらの文章の読解に影響を与えていることを示唆する。

なお、今回読解力を測るために出した、Q8、Q9の例文もしくは質問がやや難易度が高かった可能性もある。そのため、念のため、1年生の一般入試入学者に関してのみ(55名)、センター試験の国語の得点との相関係数も出してみた。なお、2020年度入学者のセンター試験国語の点数分布は以下の通りである。

このうち、国語の得点と有意な相関が出たものは、次のようになった。Q1[語の抽象化]相関係数：.412, p値：.002、Q6[因果文作成1]相関係数：.278, p値：.0049、Q7[因果文作成2]相関係数：.365, p値：.0007。やはり、語の抽象化と因果文作成問題の得点との関連が有意であることは、一貫している。

一方、センター試験の国語の得点が、Q8、Q9の読解問題に関連があるかどうかについては、Q9-1の対比関係の発見に関してのみ、相関係

表3 Q8～9相互間の相関

		比喩理解	要点把握	対比関係 発見合計	文章の応 用理解	文章の要 約
比喩理解	ピアソン 相関	1.000	0.266	0.148	0.175	0.085
	有意水準 (両側)		0.014	0.175	0.110	0.440
	N	85	85	85	85	85
要点把握	ピアソン 相関	0.266	1.000	0.117	0.269	-0.069
	有意水準 (両側)	0.014		0.285	0.013	0.530
	N	85	85	85	85	85
対比関係 発見合計	ピアソン 相関	0.148	0.117	1.000	0.141	0.257
	有意水準 (両側)	0.175	0.285		0.193	0.016
	N	85	85	87	87	87
文章の応 用理解	ピアソン 相関	0.175	0.269	0.141	1.000	0.340
	有意水準 (両側)	0.110	0.013	0.193		0.001
	N	85	85	87	87	87
文章の要 約	ピアソン 相関	0.085	-0.069	0.257	0.340	1.000
	有意水準 (両側)	0.440	0.530	0.016	0.001	
	N	85	85	87	87	87

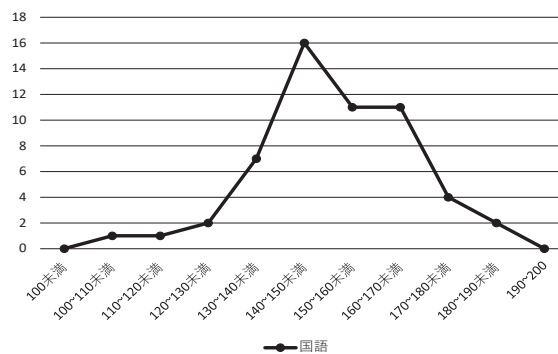


図8 センター試験国語得点分布

数：.333, p値：.0013 と有意となり、それ以外に関しては有意な結果は見られなかった。これは国語の得点が、実際に文献を読む読解力を示す指標として必ずしも有効ではないことを示唆する。

なお、Q10で福嶋式もしくはそれに近い指導を受けた経験のある人とない人の間で各回答の平均点に差があるかt検定を行ってみたが、有意のある結果が出た質問項目はなかった。

4. 結論および今後の課題

以上の分析結果から、読解力と、抽象化能力、および因果文作成能力、特に原因・理由を考える力とはある程度の関連があることが示唆されたが、それ以外とは有意な関連が見いだせなかった。因みに、複数の単語を抽象化して答えること、並びに、結果からその原因や理由を見出すことの両者に共通して言えることは、ある種の帰納的思考法であると考えられ、このような思考法が読解力に関わりがある可能性を示唆するのではないだろうか。従って、本学の学生においては、具体的な事柄を抽象化して考える訓練や、書かれた、あるいは目の前にある事態や結果に対する、原因や理由を考えるようなトレーニングを繰り返すことで、読解力や論理的思考力が高まる可能性はあるように思われる。

またQ8,Q9の設問間相互にある程度有意な相関関係が見いだせたことから、今回調べた要素に還元できない、それぞれの文書への固有の理解度が、やはり正答率との関連を持つことが示唆される。それぞれの文書の内容をより良く理解していれば、その文書に関する設問にもより良く答えられるであろう、というのは極めて常識的な結果と言える。

しかし、今回の調査データの限界から、そのような文書固有の理解度がどのような要因と関連を持つかは明らかではない。但し、Q8-2の、文書の要点を答えさせる設問で、文書の中の特定の「教訓」的内容を要点として回答するケースが続出したことを考えると、文書の全体構成把握能力のようなものが関連している可能性がある。つまり、特定の「教訓」的内容を要点として回答するケー

スというのは、文書理解が、局所局所の理解にとどまり、文書の全体構成を十分把握していないから出てきたのではないか、という推測である。これに関しては、福嶋(2010a:17-8)の主張を演繹して考えると、文章の中の対比関係や因果関係を把握することが文書の構造、フレームを把握する大きな要素になるはずだが、やはり形式的な把握だけでは不十分であり、内容自体への十分な理解がフレーム把握に欠かせないのかもしれない。これ以外にも、常識的に考えれば、文書を読み解くための背景知識を持っているかどうか、あるいは社会的な関心の有無といった要因が可能性として考えられるであろう。これらの問題については今後の課題としたい。

さらに、この設問の回答に対し、筆者なりの基準を持って評価を行い、採点を行っているが、その評価の仕方によるバイアスの問題も避けることはできない。評価の仕方、得点の与え方を変えれば結果もある程度変わる可能性は否定できない。

このように、福嶋式で養成を目的とする「国語力」だけでは、このような文書を読み解くには、仮に必要な条件であったとしても、十分条件ではないということは示唆された。また福嶋式が目指す「国語力」のうち、ある種の帰納的思考法が、相対的に、読解能力に対して影響が大きいことも示唆されたとはいえよう。ただし、「国語力」と「読解力」の因果関係についてはこの調査だけでは当然ながら明らかにできない。

なお、既に述べたように、この調査の結果は、福嶋式指導の一般的有効性に関して直ちに何らかの結論を与えるものではない。本学の入学生を対象にしているということは、既にある程度学力的に一定の幅に収まっている比較的均質な集団を対象にしている。そして、正答者の多い設問、あるいは得点分布が鋭い山をなしていて標準偏差の低い設問の場合は、他の設問との相関係数が低くなるのは当然のことである。従って、本学の学生を対象とした調査結果において、福嶋式指導が目指す「国語力」の読解力との関連が限定的であったとしても、より学力のばらつきが大きい集団に対しては、より大きな関連を見出せる可能性が残っ

ているからである。

文献

- Arai, H. N., Todo, N., Arai, T., Bunji, K., Sugawara, S., Inuzuka, M., Matsuzaki, T., and Ozaki, K. (2017). Reading Skill Test to Diagnose Basic Language Skills in Comparison to Machines, *Proceedings of the 39th Annual Cognitive Science Society Meeting (CogSci 2017)* 1556 – 1561.
- 新井紀子, 2018, 『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』, 東洋経済新報社
- 石垣恒徳, 菅原慎吾, 2020, 「リーディングスキルテスト, センター試験, 「言語運用力・数全国大学国語教育学会, 2019, 「国語科教育における「読解力」を問い直す—リーディングスキルテストをめぐる議論を中心に—」, 『第137回仙台大会研究発表要旨集』: 339-242
- 福島隆史, 2010a, 『論理的思考力を鍛える超シンプルトレーニング』, 明治図書
- 福島隆史, 2010b, 『「ビジネスマンの国語力」が身につく本』, 大和出版
- 理解析力」テストの相関及び因子分析」, 『大学入試研究ジャーナル』30号: 36-43
- 野矢茂樹, 2001, 『論理トレーニング101題』, 産業図書
- 野矢茂樹, 2006, 『新版 論理トレーニング』, 産業図書
- 間瀬茂夫, 富安慎吾, 2019, 「リーディングスキルテストと学力調査の相関からとらえた読解力に関する研究」, 『第137回仙台大会研究発表要旨集』: 175-8, 全国大学国語教育学会

付録：質問票

- Q1. 以下の例にならって、出題される複数の語をまとめて抽象化して表現する言葉を書いて下さい。
- 例1：サッカー、テニス、野球、バレーボール、バスケットボール → 解答例：球技（を表す言葉） 例2：走る、歩く、しゃべる、座る、食べる → 解答例：動作（を表す言葉）
- Q1-1. ソファー、たんす、テーブル、椅子 / Q1-2. 喜び、悲しみ、悔しさ、驚き、迷い
- Q1-3. クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ、犬かき / Q1-4. 対等、上下、前後、表裏
- Q1-5. 焼く、煮る、蒸す、揚げる、ゆでる / Q1-6. 父、母、夫、妻、上司、部下、社員
- Q2. 例にならって、それぞれの問に出てくる抽象的な語を、具体的に言い換えた語句の例を3つ以上挙げて下さい。
- 例1：球技。例えば... → 解答例：サッカー、テニス、野

球、バレーボール、バスケットボール 例2：動作（を表す言葉）。例えば... → 解答例：走る、歩く、しゃべる、座る、食べる

- Q2-1. 接続詞。例えば... / Q2-2. 政治思想。例えば... / Q2-3. 親族関係。例えば...
- Q2-4. 公共交通機関。例えば... / Q2-5. ルール。例えば... / Q2-6. 自然現象。例えば...
- Q3. 以下の各問に示される文章は、要するに何についての文章でしょうか。例にならって、名詞（体言止め）で簡潔に答えて下さい。
- 例：「出勤時間に遅れたのは、昨夜の打ち上げで帰宅が遅くなり、寝坊したからです」
→ 解答例：出勤時間に遅れた原因
- Q3-1. 「国勢調査は5年に1度、各世帯の居住実態や通勤、通学の状況なども調べ、最も重要な国の統計調査に位置づけられる」
- Q3-2. 「新型コロナウイルスの国内の感染者は26日午後9時半現在で新たに643人が確認された。死者は3人だった」
- Q3-3. 「男性講師は6月にあった文理学部の法学のオンライン講義で、ブラック・ライブズ・マター (BLM) 運動について『黒人さんが暴れている』などと述べた」
- Q3-4. 「PCR検査には見落としがある上、『偽陽性』も出る。感染の確率が低い集団に検査を行うと、偽陽性となる人は増えてしまう」
- Q3-5. 「被害総額が1800億円に上ると言われるジャパンライフ事件。安倍晋三・前首相主催の『桜を見る会』が信用担保の小道具として使われたといわれる。会の招待状や政治家との写真などを信用して大金をつぎ込んだ被害者も多いという」
- Q4. 「AはCである。それに対してBはDである」というパターンに当てはまるような文章を、例にならって、A, B, C, Dに適切な言葉を入れて3つ考えて下さい。その際、AとB, CとDが対比関係になるように作成して下さい。
- 例：会社は公的な場である。それに対して、自宅は私的な場である。
(注釈、この場合 A=会社、B=自宅、C=公的な場、D=私的な場、となる)
- Q5. 「AはBという点ではCだが、Dという点では、Eである」というパターンに当てはまるような文章を、例にならって、A, B, C, D, Eに適切な言葉を入れて3つ考えて下さい。その際、CとEが対比関係になるように作成して下さい。なお、表現の都合で多少語尾などを変えても（例えば、「点」を「意味」に、「であ

る」を「だろう」に変えるなど) 構いません。

例: 人が多い繁華街は、犯罪にあう可能性が高いという点では危険だが、犯罪にあいそうになった時に助けを得やすいという点では安全である。

(注釈、この場合 A=人が多い繁華街、B=犯罪にあう可能性が高い、C=危険、D=犯罪にあいそうになった時に助けを得やすい、E=安全、となる)

Q6. 例にならって、以下の設問に出ている文章の続きを考えて下さい。その際に、文章の前半が、解答した後半の理由になるよう文を作成して下さい。

例: タクシーは渋滞に巻き込まれる可能性がある。だから
[]

解答例: 電車と徒歩で移動したほうが確実だ

Q6-1. インターネット上の情報の質は、玉石混淆である。だから、[]

Q6-2. ロスジェネ世代の人々は学校を卒業した時に、たまたま雇用環境が厳しかった。だから、[]

Q6-3. 犯罪者が更正して社会復帰に成功するには、本人の強い意欲と意思が必要と思われる。だから、[]

Q7. 例にならって、以下の設問に出ている文章の前半を考えて下さい。その際に、解答した文章の前半が、出題されている後半の理由になるよう文を作成して下さい。

例: []だから電車と徒歩で移動したほうが確実だ
解答例: タクシーは渋滞に巻き込まれる可能性がある。

Q7-1. []だから、「情けは人のためならず」といわれるのである。

Q7-2. []だから、日本における女性差別はなお根深いと言わざるを得ない。

Q7-3. []だから、安易にSNSなどに芸能人の自殺の原因に対する憶測を書き込むことは控えるべきだ。

Q8. 次の、本学元教授の訃報記事を読んで、以下の設問に答えて下さい。

引用: 朝日新聞 2020.8.8夕刊「訃報: 前沢哲爾さん」

Q8-1. 上の記事の黄線部分、「都市や撮影所中心のヒエラルキー」という言葉を、なるべく易しい言葉を用いて、わかりやすく具体的に言い換えて下さい。

Q8-2. 上の記事の要点を1行で書き表して下さい。

Q9. 次の新聞記事を読んで、以下の設問に答えて下さい。

引用: 朝日新聞 2020.8.12夕刊 工藤郁子「にじいろの議: 人々の『眠り』と『目覚め』」

Q9-1. この文章は多くの、2つの考えの対比を提示することで構成されていますが、その考えの対比のうち、3

つを、例にならって、整理しなおして書いて下さい。

例: (上の記事の黄色い部分) 人民は、根本的変革が必要のない時(通常)には、「眠って」国政を政府に任せる、対、人民は、根本的変革が必要な時は、国政を政府に任せず「目覚めて」熟議し決定する。

Q9-2. 筆者の主張に基づいて考えると、私たちが普段スマホのアプリやサービスを、ろくに、利用規約や利用条件も読まずにダウンロードして利用している理由はどういうことになるとおもいますか。お答え下さい。

Q9-3. この記事の要点を、本文をそのまま抜き書きするのではなく、なるべく易しい、わかりやすい言葉を使ってまとめて下さい。

Q10. [アンケート] あなたは、今まで、本日出されたような問題(但し、Q8, 9の新聞記事を読む問題を除く)を使って国語力を養成するような授業を受けたことがありますか? 当てはまる選択肢すべてにチェックをつけて下さい。

1. なかった / 2. 小学校で受けた / 3. 中学校で受けた / 4. 高校で受けた / 5. 予備校・塾で、あるいは家庭教師から受けた / 6. 同様な問題が載った参考書や教材を使って家庭学習を行った

注

1) 例えば、全国大学国語教育学会では、新井紀子(2018)の出版を機に、新井の統語的側面から読解力を説明しようという、読解力解釈に疑問を呈するシンポジウムが開かれている(全国大学国語教育学会, 2019)。